

# 目 次

1 主題について .....	1
2 授業研究 .....	1
(1) 小学校における授業研究	
【授業研究1】体験活動を通してコミュニケーションを図ろうとする態度を 育てる外国語活動 .....	2
<単元名> 小学校第3学年「クイズ大会をしよう！五感を使 って楽しもう」	
【授業研究2】コミュニケーション能力の「素地」をはぐくむ外国語活動 .....	7
自分の思いを伝え、積極的にコミュニケーションを図ろう とする態度を育成する <単元名> 小学校第4学年「できることはなあに？」	
(2) 中学校における授業研究	
【授業研究3】発表につなげる4技能を統合的に活用させる英語科学習指導 .....	12
<単元名> 中学校第1学年「クラスの実態を調査せよ！」	
【授業研究4】自分の考えや気持ちなどを書いて表現する力を育てる英語科 学習指導 .....	17
パラグラフ・ライティングの実践を通して <単元名> 中学校第2学年「Let's Read 1 『A Magic Box』」	
(3) 高等学校における授業研究	
【授業研究5】段階的な Show and Tell の指導を通じ、思考力や表現力を育 てる英語科学習指導 .....	23
<単元名> 高等学校第3学年「大切な物をクラスメイトに紹 介しよう！」	
3 研究のまとめ .....	28

## 外国語活動・外国語(英語)科研究主題

### 自ら考え表現する外国語活動及び外国語(英語)科学習の指導の展開

#### 1 主題について

##### (1) 中学校，高等学校外国語(英語)科授業づくりの視点

今回の学習指導要領の改訂に向けた外国語(英語)科に関する教育課程改善の基本方針には，以下のような内容が示されている。

「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について，自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し，「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう，中学校，高等学校を通じて，4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図る。

上記を踏まえた学習指導要領改訂の趣旨に基づき，本研究においては，知識・技能を活用して課題を解決するための思考力，判断力，表現力等の育成を目指した「自ら考え表現する」外国語科の授業を，以下のような視点から構築することとする。

「スピーチを聞きながら，メモを取り，そのメモを見ながら質問する」，「聞いて情報を集め整理して伝える」等の，実際のコミュニケーションに見られる複数の技能が統合した活動を取り入れる。

(4技能の総合的育成)

段階を踏まえたプレゼンテーション指導の在り方について提案する。

(話すことを通じた発信)

考えたことを，まとまった英文で書いて表現する力を伸ばす指導プロセスについて提案する。

(書くことを通じた発信)

国立教育政策研究所 平木 裕教育課程調査官は「言語活動を充実させることにより，言語材料の定着を図り，コミュニケーション能力の基礎を育成する」と述べている。本研究においては，上記3点の視点を通して「充実した言語活動」の具体化を図っていく。

##### (2) 小学校外国語活動授業づくりの視点

中学校外国語(英語)科と同時に示された新小学校学習指導要領では，外国語活動の目標を次のように示している。

外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

この目標から，「考えて表現する」場面づくりをねらいとして，以下の視点から授業を構築することとする。

児童が，互いに必要な情報を，工夫しながら自由にやりとりする活動場面を設定する。

児童が，自分の思いや考えを正しく伝達できるよう，適切な表現の判断を行う活動場面を設定する。

#### 2 授業研究

研究主題に関する基本的な考え方を踏まえ，児童生徒が自ら考え表現する場面づくりに配慮した手立てを講じ，小学校2校，中学校2校，高等学校1校で授業研究を行った。

**体験活動を通して、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる外国語活動**

1 単元名 「クイズ大会をしよう！五感を使って楽しもう」

2 単元の目標

「身近なもの」を尋ねたり，答えたりする活動を通して，積極的にコミュニケーションを図ろうとする。 (コミュニケーションを図ろうとする態度)

英語を使って「身近なもの」を尋ねたり，答えたりすることに興味・関心をもつ。 (言語や文化に対する体験的な理解)

友達と英語でコミュニケーションすることを通して，「身近なもの」を尋ねたり，答えたりする表現に慣れ親しむ。 (音声や基本的な表現への慣れ親しみ)

3 教材観

小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成20年8月）では，外国語活動の目標に「外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。」ことが挙げられている。小学校3年生という発達段階を考慮し，クイズを通して楽しく活動させる中で，英語の表現に興味をもち，英語を使ったコミュニケーションを図ろうとする態度を育てたいと考えた。

児童は，これまでに簡単な英単語やあいさつなどを用いたコミュニケーション活動を体験してきている。本単元では，最初に形の名前を学び，色と組み合わせながら表現する活動を行う。次に生き物の名前を学び，2種類のうちどちらが好きかを尋ねたり，答えたりする活動を行い興味を高めていく。そしてものを尋ねる時はどう言うのかを知り，互いに尋ねたり，答えたりする活動に取り組むようにする。

活動をクイズ形式で進めていくことによって，関心の高まりが見られ，多くの児童が積極的に取り組むと考える。本単元のクイズは，視覚や触覚などの五感の情報をヒントにするので，“What's this？”というだけでよく，日本語の表現で「これなーんだ？」という意味に置き換えられ，比較的容易に発話できる。また，身近な食べ物や動物，そして色などの外来語は，日常生活の中で多く使われているので，答える側も今までの生活経験から得た知識を生かして，活発なコミュニケーションが生まれると考える。

4 児童の実態

表1 外国語活動に関する意識調査 (平成21年6月23日実施 3年2組 39人)

1	楽しく活動できていますか。 とても楽しい(30人) 楽しい(7人) あまり楽しくない(2人) 楽しくない(0人)
2	友達や先生に進んで話をしたり，聞いたりすることができていますか。 よくできる(18人) だいたいできる(15人) あまりできない(5人) できない(1人)
3	友達や先生の顔を笑顔で見て，話をしたり，聞いたりすることができていますか。 よくできる(17人) だいたいできる(15人) あまりできない(6人) できない(1人)
4	英語やジェスチャーを使って，自分の考えや気持ちを伝えることができていますか。 とてもできる(17人) だいたいできる(13人) あまりできない(7人) できない(2人)
5	友達の新しいよさを知ったり，考えが違ったりした時，やさしい気持ちで接することができていますか。 よくできる(17人) だいたいできる(14人) あまりできない(7人) できない(1人)

アンケート結果からは、外国語活動に楽しく積極的に取り組んでいる児童が多いことが分かる。実際に英語を使ったあいさつや歌などのゲームを取り入れた簡単な表現を聞いたり、話したりすることをとても楽しみにしている様子がうかがえる。友達や先生に笑顔で積極的に話をしたり聞いたりすることは、7割の児童ができると答えているが、実際に活動を観察していると恥ずかしさや自信のなさなどから進んで話しかけることが難しい児童が見られる。これまでの外国語活動の時間を振り返ると、1対1やグループ内での活動など少人数でのかかわりは多いが、クラス全体で活動する場の工夫が不足していたためと考えられる。普段の学習においても、言葉を通して、自分の伝えたいことを正しく相手に伝えることができなかつたり、相手の言っていることが正しく理解できなかつたりと、児童相互のコミュニケーションが図れないこともあった。

外国語活動や国語などの学習で、児童同士がかかわる活動を工夫し、自分の考えや意見を自分の言葉を使って、抵抗なく発表できる児童を多くしていきたい。話し合いを通して、自他の違いやよさに気付き、互いを尊重しながら生活できる児童を育てたいと考えている。

## 5 研究主題に迫るための手立て

### (1) 身近な素材の活用とクイズ形式による活動意欲の喚起

児童は、友達や担任に何かを説明するとき、自分の見たことや聞いたこと、感じたことなどの経験して得た知識を自分なりのことばを用いて自己を表現する。そして、聞き手は、共感したり、質問したり、さらに新しい情報を伝えたりするなどして交流を展開する。第3学年の発達段階では、この交流の場では、よく「何を買ったでしょう」、「どこに行ったでしょう」などのようなクイズでのやりとりを耳にすることがある。今回の活動では、児童に興味・関心の高いクイズ形式を取り入れることによって活動意欲を喚起したいと考える。

クイズ形式の活動では、相手に見えないように隠した絵カードを、ヒントをもとに当てていくインタビューゲームを行う。ゲームの答えは身近な素材である食べ物、生き物、色、形、外来語をもとに自作の絵カードを作成する。自作の絵カードには自分の思いが表れる。また、身近な素材を取り入れれば、外国語活動に苦手意識をもっている児童も抵抗なく取り組むことができると考える。ゲームでは、どんなヒントを出せば相手が答えやすいか質問者はいろいろと思考をめぐらす必要がある。工夫したヒントで相手が正解を答えたとき、英語を使って思いや考えが通じた喜びを味わわせることができる。

### (2) 友達とのかかわり合い

クラス全体の活動の場を工夫するためにインタビューシートを活用する。インタビューシートには、正解した相手にシールを張っていくようにする。友達とクイズ形式で会話をし、グループ対抗で行うことで、友達とのかかわりを深めていくことをねらいとしている。児童は勝敗があり、適度な競争があるゲームを好むことを考慮し、力量差がないようなグループ作りやだれにも分かりやすく公正・公平なゲームのルール作りをALTと話し合いながら考えた。

このゲームで、友達とやりとりをすることを通して友達のよさを認識したり、自分が作った問題がゲームに使用できたことで満足感を味わわせ、自尊感情を高めていきたいと考えた。

(3) 五感を働かせ、ジェスチャーを使う体験

実物や絵カードを多く使用することで、目や耳ばかりでなく、触感、動作化などを取り入れることで体験的に理解を深めるような活動を取り入れたい。音声によるコミュニケーションだけでなく、ジェスチャーや表情などを手がかりとすることで、相手の意図をより正確に理解したり、ジェスチャーや表情などを加えて話すことで、自分の思いをより正確に伝えたりすることができることなど、言葉によらないコミュニケーションの役割を理解させたいと考える。クイズのヒントを出したり、答えたりする活動においては、児童が自ら理解したり運用したりできる表現が限られているため、ジェスチャーなどを活用して表現させるなど、コミュニケーションを図る楽しさを体験させるようにする。

(4) 他教科との関連

小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成20年8月）には、「指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」とある。児童にとってゲームや歌が楽しいということは大切であるが、さらに活動を充実させていくために、他教科等で得た知識や体験を活用し、児童の知的好奇心を刺激する活動を展開していく。第2時において理科で学習した「昆虫」を取り入れる。理科で学習した「昆虫」を英語を使って表現したり、ゲームをすることで、言葉のおもしろさに気付いたり、学習の楽しさを味わったりすることができるのではないかと考えた。

6 指導と評価の計画（4時間取り扱い）

時	主な内容	態度	体験	慣親	評価規準（方法）
1	色や形で遊ぼう！ 形の名前に慣れ、色と組み合わせながら表現することに親しむ。 I like ....				・英語を聞こうとしたり、話そうとしたりしている。（発表・観察） ・音声やリズムに慣れ親しんでいる。（発表・観察・振り返りカード）
2	生き物大好き！ 生き物の名前に慣れ、進んでゲームに親しむ。 Do you like ... ?				・英語を聞こうとしたり、話そうとしたりしている。（発表・観察） ・音声やリズムに慣れ親しんでいる。（発表・観察・振り返りカード）
3	食べ物いろいろ！ 果物や野菜の言い方に慣れ、2種類のうちどちらが好きかを尋ねたり、答えたりする活動を楽しむ。 Do you like ...or...?				・英語を聞こうとしたり、話そうとしたりしている。（発表・観察） ・英語を使って、尋ねたり、答えたりする表現を体験的に知る。（発表・観察・インタビューシート・振り返りカード）
4 本時	これなーんだ?? ゲームをしよう！ What's this ?の言い方・It's a .... の答え方に慣れ、友達とのコミュニケーションを楽しむ。				・友達やALTと進んでコミュニケーションを図ろうとしている。（発表・観察） ・英語を使って、尋ねたり、答えたりする表現を体験的に知る。（発表・観察・インタビューシート・振り返りカード）

7 授業の実践

(1) 目標

友達やALTと進んでコミュニケーションを図ろうとしている。

(2) 準備・資料

CDプレーヤー、ステッカー、絵カード（児童作成）、探検バック、振り返りカード、掲示用絵カード、ブラックボックス、実物、インタビューシート

## (3) 展開

( 評 は評価, は支援を要する児童への手だて)

過程(時間・分)	学 習 活 動	HRT(担任)の指 導	ALT(外国語指導助手)の指導
1 あいさつ (1)	・Hello, Neptune. I'm happy(ok),and you?	・児童が元気よくあいさつができるように一緒にあいさつをする。	・Hello, everyone. How are you? I'm ...
2 歌 (3)	・「Head, shoulders, knees and toes」を“Big,small,and long short”に替えてダンスをしながら歌う。	・児童と一緒に楽しく歌う。 ・今まで学習してきた色・形・生き物・食べ物のうち大きさと長さで対比できる絵カードを提示しながら,ALTと歌う。	・HRTの提示するカードと合わせながら,ダンスをして楽しく歌う。
3 知る (2)	・チャンツを用いて単語の復習や新出単語の表現について練習する ・本時の学習課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">いろいろの人と英語やジェスチャーを使って,たくさん話そう。</div>	・チャンツで,リズムカルに音を繰り返させる。 ・明るい雰囲気づくりに努めながら,本時のめあてや内容を知らせる。	・新出の表現についてゆっくりと繰り返し,児童に練習させるようにする。 ・リズムカルに「これは,何?」の表現を繰り返し,楽しい雰囲気づくりに努める。
4 ふれる (8)	・ブラックボックスの中のものや効果音を英語を使って聞いたり,尋ねたりする。 ・答えを出すためのヒントの聞き出し方,ヒントを出す言い方にも慣れる。	・ブラックボックスに実物を入れ,何が入っているか,またCDをかけ,何を表す音かを考えさせる。 ・HRTとALT,ALTと児童で,ブラックボックスや効果音を使って,デモンストレーションをする。ルールを理解させるために故意に誤った言い方でやって見せる。 ・ヒントのやりとりをする場合もデモンストレーションに取り入れ,コミュニケーションが活発になるように支援する。 ・アイコンタクトに心がけ,にこやかに聞き合うことができるように支援する。	・HRTとALT,ALTと児童でデモンストレーションをし,問答の仕方を確認できるようにする。 ・笑顔で対応することやアイコンタクトの大切さについても指導する。
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">           Q:What's this?            A:Hint, please.            Q:Hint one! Fruit.            A:It's a....            Q:Yes/No. Hint two! Yellow.            A:It's a....            Q:Yes/No. Hint three! Long.            A:It's a....            Q:Yes, good.(Great.)         </div>		
5 慣れる (6)	・ペアを組んで,自分たちが作ったカードを使って“What's this? It's~”の言い方に慣れる。	インタビューゲームがスムーズにできるように,ペアで練習させる。	・HRTと分担し,活動が難しいペアには一緒に絵を見ながら,ゆっくりと“What's this? It's a....”と言うなどして支援する。
6 楽しむ (18)	・インタビューゲームを行う。 ・なるべくたくさんの 문제에 挑戦し,ステッカーを獲得ゲームでグループごとに競う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">【ステッカーのやりとりの時】 Q:Here you are . A:Thank you</div> ・グループごとに獲得したステッカーの合計について確認する。	・答えられたら,互いにステッカーのやりとりをするに気付かせる。 ALTと分担して,援助が必要な児童にはともに会話しながら支援していく。 評 友達やALTと進んでコミュニケーションを図ろうとしている。(観察・インタビューシート) ・優勝チームを,みんなで拍手で賞賛できるようにする。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <b>【ルール】</b>            1 ヒントは,3回まで出せる。            2 ヒント1回につき,1回答えなければならない。            3 3回答えたら,おしまい。            4 当たったら,ステッカーをもらえる。その時,正解の絵カードを見せる。当たらなかったら,ステッカーはもらえない。            5 グループごとの集計結果で勝敗を決める。         </div>
7 振り返る (6)	・振り返りカードに記入する。 ・感想を発表し合う。	・次の活動に生かせるように思ったこと・感じたままに記述してよいことを助言する。 ・Good Pointを挙げ,自信をもたせる。	・大きなステッカーで,賞賛する。
8 あいさつ (1)	・Good bye .	・Good bye, everyone . See you next time .	・Good bye, everyone .

## 8 授業研究の成果

### (1) 身近な素材の活用とクイズ形式による活動意欲の喚起について

最初に、英語を使って普段児童がクイズを進めるような形式で、ブラックボックスを用いてクイズを出していった。「ヒント」や「ワン・ツー」などの音声を耳にしたことで、どんな英語を使ってどのように進めるかという基本的な活動の流れが児童に明確になっていった。授業後の振り返りによると自分で描いた絵カードを使ってクイズを出し合うことで、多くの児童が問題を出す時の優越感や充実感、答えを当てた時の喜びや達成感を味わえた感想をあげていた。身近な素材を取り上げたことで、「やってみよう。」「できそう。」「その英語、聞いたことがある。」など活動への意欲が高まっていった。

資料1  
「クイズに挑戦する児童」



### (2) 友達とのかかわり合いについて

インタビューシートを活用し、グループ対抗を取り入れたことで、たくさんのクイズに答え、ステッカーを獲得しなければ勝てないことから、男女分け隔てなく、広い範囲で、誰にもインタビューする姿があった。この体験活動を通して、児童はヒントを考えたり、問題に答えたりすることで、友達の発想のよさやおもしろさに気付いたり、友達とのかかわり合いが多い活動となった。なかなか答えが分からなかったり、ヒントが見つからないような困難な場面では、クイズを簡単にしたりヒントを分かりやすくしたりと、相手のことを意識した活動が見られた。また、“Hint one.” “Good.” などのコミュニケーションの場面に応じた表現ができるように指導することで、児童は、友達とのコミュニケーションを自分なりの言葉を使ってつないでいった。

### (3) 五感を働かせ、ジェスチャーを使う体験について

ゲームの中で、児童は「犬」を出題し、そのヒントとして「ソーセージ」「ホットドッグ」「ワンワン」などと、体験して得た五感をもとにヒントを考えていた。ヒントを出すための「大きい、長い」などの形容詞については、“Head, shoulders, knees and toes”の歌を“Big, small, and long short”に替えて動作化しながら歌うことで、大きさや長さを体で表現することを通して理解させていった。また、ジェスチャーを使った活動をすることで、無理なく繰り返しを意識せずに取り組んでいた。活用できる語句が少ないため、ジェスチャーを使ってコミュニケーションを図ることは、表現方法を広げる手段となった。そして、ジェスチャーを手がかりとすることで、クイズの答えが考えやすくなり、コミュニケーションを図る楽しさにつながっていった。

### (4) 他教科等との関連について

国語科の「どちらが好き」の話し方・聞き方と結び付け、第3時では“Do you like ~ or ~?”と関連させて学習した。理科、総合的な学習の時間では、児童が大好きな「昆虫」を第2時に取り入れた。教科書で学習したものを英語を使って学習することで、言葉のおもしろさに気付いたり、学習の楽しさを味わったりすることができた。

現在、帰りの会で、児童が一人ずつ担任とクイズを出し合う活動を続けている。児童は、自分の順番を楽しみにしており、少しずつだが学習した英語を使って自分なりに恥ずかしがらずに問題を出したり、答えたりしている。これを続けることで、外国語が通じた喜びを味わいながら外国語活動に慣れ親しむとともに、自信につながっていくものと考えている。

**コミュニケーション能力の「素地」をはぐくむ外国語活動**  
**自分の思いを伝え、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成**  
**する**

1 単元名 「できることはなあに？」

(英語ノート2「Lesson4 - できることを紹介しよう -」)

2 単元の目標

ゲーム、インタビュー(「できること」「できないこと」)などの活動を通して、ALTやHRT、友達と楽しみながら、進んでコミュニケーションを図ろうとする。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

どんなことができるか友達に尋ねたり、答えたりする活動を通して、聞き手を意識しながら自分の思いを相手に伝える。

(コミュニケーション能力)

「できること」を尋ねたり、「できること」や「できないこと」を答えたりしながら、英語の音声やリズムに慣れ親しむ。

(言語や文化についての関心・意欲・態度)

「できること」や「できないこと」を尋ね合う活動を通して、友達や自分との違いを知り、それを認め合いながら、ふれあいや交流を楽しむ。

(国際理解・共生)

3 教材観

本単元は、本校の年間指導計画(第4学年9月「好きなスポーツは?」)と英語ノート2(Lesson4「できることを紹介しよう」)を関連させ、「できる」「できない」という“can”の表現を扱った題材である。どんなことができるか友達に尋ねたり、答えたりする活動(ゲーム・インタビュー・発表等)を通して、周囲の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとすることをねらいとしている。

「できる」「できない」には、目に見えてはっきりと分かる客観的なものと主観的なものとの両面が考えられる。ここでは、「できる」児童をほめる場でもなく、「できない」児童を励ます場でもない。友達どうして尋ね合う活動を通して、お互いの意外な面を知り、自分や友達の新しい気付きを大切にしたいと考える。互いの違いを知り、その違いを認め合える人間関係(「共生」)を築いていきたいと考える。

4 児童の実態

表1 外国語活動に関する意識調査(平成21年9月3日実施 第4学年1組 32人)

質問内容	回答			
	とても楽しい	楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
1 ハッピータイム(外国語活動)は、楽しく活動できていますか。	15人	15人	2人	0人
2 ハッピータイムでALTの先生や友達に進んでかかわることができていますか。	10人	19人	3人	0人
3 クラスの友達の違いやよさを知り、相手の気持ちを考えてかかわることができていますか。	8人	19人	5人	0人
4 ハッピータイムで先生や友達の話聞くことができていますか。	13人	17人	2人	0人
5 英語やジェスチャーを使って自分の考えや気持ちを伝えることができますか。	11人	13人	8人	0人
6 外国の人や文化について、もっと知りたいですか。	10人	17人	5人	0人



本学級の児童（男子16人 女子16人 計32人）は、入学当初より外国語活動に取り組み、4年目を迎える。アンケートの結果から、多くの児童が活動に興味をもち、楽しんでいることが分かる。これまでの外国語活動の時間（Happy time）においては、ゲーム等を通して簡単な英語に慣れ親しみ、それらを使ってコミュニケーションを図る活動を行ってきた。ALTとは、外国語活動の時間以外に、様々な行事や給食、清掃時、休み時間等でも触れ合う機会も多いため、おくすることなく接することができる。外国の人や文化にも興味をもち始め、「もっと知りたい、話したい、コミュニケーションを図りたい。」と願っている児童も多い。一方で、相手の気持ちを尊重した人とのかかわり合いが不十分であったり、自己表現することに苦手意識をもっている児童も見られる。

## 5 研究主題に迫るための手立て

新小学校学習指導要領の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」に重点を置き、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」、「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」という三つの柱から成り立つ。これらを踏まえた活動を統合的に体験することで、小学校外国語活動では、中学校、高等学校の外国科の学習につながるコミュニケーション能力の「素地」を養うことを目標としている。そこで、以下の手立てを構築し、主題に迫りたいと考える。

### (1) 体験重視の活動そして発信の場へ

本単元では、“can”という表現を扱った題材を通して、コミュニケーション能力の素地を段階的にはぐくんでいく。第1時の導入では、道具を実際に使い（コマ、けん玉、お手玉、ピアノ、卓球）何ができて何ができないか、音声表現に慣れ親しませながら、「体験」を通して気付かせていく。第2時では、ペアやグループ活動を通して、コミュニケーション能力の「聞く・伝える」という基礎的な表現に慣れ親しませていく。第3時（本時）では、インタビューゲームを通して、よりたくさんの人とコミュニケーションを図り、楽しさを体験させていく。第4時では、まとめとして、クイズ大会を通して自己発信の場を設定する。コミュニケーション体験の場を多く設定していきながら、コミュニケーション能力の素地を育み、同時に自己肯定感や仲間意識ももてるようにしていきたいと考える。

### (2) インタビューシートの工夫（英語ノートを活用）

本時（第3時）のインタビュー活動では、一問一答の会話で終わらないように、より長く会話を続ける工夫をし、コミュニケーションを図る楽しさを体験させていきたい。そこで、英語ノートの一部を活用し、フローチャート式のインタビューシートを作成した。（P10、授業の実践参照）。10枚の絵は、事前に児童が好きな箇所に張ることで、オリジナルワークシートができあがり、インタビューへの期待感が大きくふくらむのではないかと考えた。最後の相手のサインをもらうまで、相手に4回、質問したり答えたりすることになる。さらに、A～Hまで全部そろえるようにすることで、より多くの人と会話をしなければならない。これが、児童の積極性を引き出す有効な手段ととらえた。

### (3) 豊かなコミュニケーションの工夫～思考力・判断力・表現力をはぐくむ視点から～

質問の答え方としては、「できる」・「できない」で答えると、すぐに会話も終わってしまう。「できる」に関して、どの程度できるのか、人それぞれ程度も違う。そこで、答え方を“Yes, very well.”, “Yes, I can.”, “Yes, a little.”, “No, I can't.”の4段階

に分ける。質問に対して、「自分がどの程度できるか、できないか」の思考力を働かせ、四つの段階を自分で判断し、相手に伝えていく。自己表現を苦手とする児童でも、自信をもって表現できるように、表情やジェスチャーを加えていきたい。言葉にたよらないコミュニケーションの大切さにも気付かせたいと考える。また、視覚的にとらえやすいように、ALTの表情やジェスチャーをピクチャーカードとして下の図のように提示した。



(4) 抽出児童の見取りから授業を評価する

ねらいが達成されたかどうか、「評価」することが大切である。そこで、学級から抽出児童を選び、その児童の様子を観察することで授業を評価していくことにする(授業評価)。授業評価を授業者だけで行うことは難しいため、参観した教師も含め、評価規準を基に児童の行動から判断していく。授業後の研究協議会等で授業内容や児童の到達度を検証していきながら、本時の授業の妥当性を判断していき、ねらいに迫っていくこととする。

【抽出児童について】

D男...どの学習にも意欲的で、外国語活動に積極的に参加している。

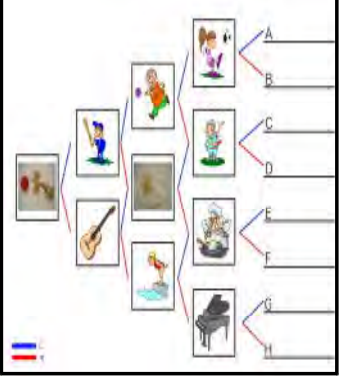
E子...外国籍の児童で、友達との意思の疎通が困難な面がある。

F男...特別な支援を要し、友達とコミュニケーションをとることが苦手である。

6 指導と評価の計画(4時間取り扱い)

(1) 評価規準【別添、資料参照】			
	国際理解活動		外国語活動
国理	共生	A	コミュニケーション活動への関心・意欲・態度(かかわる力)
国理	個の確立	B	コミュニケーション能力(聞く力・伝える力)
国理	自己決定・行動力	C	言葉や文化についての関心・理解・態度(広い視野)
(2) 指導と評価の計画			
	主な活動内容		評価規準(方法)
1	「できるかどうかやってみよう」 様々な道具を実際に体験しながら、Can you~? Yes, I can. / No, I can't.の表現に慣れる。		【A】ALTやHRT、友達と楽しみながら、進んでコミュニケーションを図ろうとしている。(観察・振り返りカード) 【C】Canを用いた音声表現に慣れ親しむ。(観察・振り返りカード)
2	「どんなことができるかな?」 どのようなことができるかを、友達に尋ねたり、答えたりする。		【B】相手が伝えようとするをおおむね理解している。(観察・インタビューシート) 【B-】聞き手を意識しながら自分の思いを相手に伝えている。(観察・インタビューシート)
本時	「インタビューをしよう」 相手に尋ねたり、「自分ができること・できないこと」を伝えるインタビューゲームを行う。		【B】聞き手を意識しながら尋ねたり、自分の思いを相手に伝え、会話を続けている。(観察・インタビューシート) 【国理】友達と自分の違いを認め合いながら、友達とふれあいを楽しんでいる。(観察・インタビューシート・振り返りカード)
4	「紹介しよう」 グループで、自分のできることを発表したり(「Show & Tell」)、「Who am I?」クイズ大会で、友達を紹介する。		【A】友達と協力して楽しく活動しようとしている。(発表・観察・振り返りカード) 【国理】友達と自分の違いを認め合いながら、友達とふれあいを楽しんでいる。(発表・観察・振り返りカード)

7 授業の実践

活動内容 ( 児童 )	H R T	A L T	留意点 評価
<p>1 あいさつ ( Greeting ) 5分                      (1) 歌に合わせて、全体で元気よくあいさつをする。</p> <p>(2) 「Who am I ?」クイズ ( 動物 )                      Q &amp; A</p>	<p>・ Hello, everyone.                      ・ Let's sing.                      「 Hello song. 」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                         例 ) Hello.                          I can swim.                          I can walk.                          But I can't fly.                          Who am I ?                     </div>	<p>・ Hello, everyone.</p>	<p>・ ジェスチャーなどをしながら、元気よくあいさつをし、和やかな雰囲気を作る。</p> <p>・ 「Who am I ?」クイズは第4時の活動となるので、クイズの出し方にも注目させる。</p>
<p>2 復習 ( Review , Q&amp;A ) 10分                      (1) 慣れ親しんだ表現をチャンツで復習する。                      Can you ~ ( swim, bowl... ) ?                      - Yes, I can. / No, I can't.</p> <p>(2) 伝言ゲームをする。</p> <p>(3) ペアになり、A L T や友達とスネークゲームをする。</p>	<p>・ Yes/No の絵カードを提示しながら全体の様子を見る。</p> <p>・ 全体の様子を観察し、状況を見て交代させる。</p>	<p>・ 絵カードを提示しながら、リズムののって問いかける。</p> <p>・ 列の中に入りながら、児童を支援する。</p>	<p>・ 絵カードを見ながら、瞬時に答えるようにする。</p> <p>・ 会話のルールを確認しながら、互いに顔を合わせて会話ができるように助言する。</p>
<p>3 Presentation and Activities ( 提示と活動 ) 25分</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>インタビューゲームをしよう</p> </div> <p>(1) H R T と A L T , 児童同士のデモンストレーションを見る</p> <p>(2) インタビューゲームを行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">  </div> <p>例【インタビューシート】                      ... Yes, I can.                      ... No, I can't.</p>	<p>・ 最初は H R T と A L T , 次に児童同士でゲームのデモンストレーションをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>A : Hello.                          B : Hello.                          A/B : One, two, three, shoot!                          (ジャンケンをする。)                          A : Can you ~ ?                          B : Yes, I can. / No, I can't.                          Yes, a little. / Yes, very well.                          A と B を交代して行う。</p> </div> <p>・ ルール説明の補足をする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【ルール】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>最後まで会話を続ける。</li> <li>会話終了後、答える側が相手のシートにサインを書く。</li> <li>A から H まで縦に1セット名前がそろったら、先生からステッカーをもらえる。</li> <li>1セット ( 男女各4人ずつ ) とする。</li> </ol> </div> <p>・ 全体の様子を見ながら活動の状況を見て指示をする。</p>	<p>・ ルールを説明する。</p> <p>・ ゲームに参加しながら、児童を支援する。</p>	<p>・ 教師や児童のデモンストレーションを見て、ゲームの仕方を確認する。</p> <p>【評価規準 B】</p> <p>・ インタビューを通して、聞き手を意識しながら相手に尋ねたり、「自分ができること・できないこと」を伝え、最後まで会話を続けている。                      ( 観・インタビューシート )</p> <p>【評価規準国理】</p> <p>・ 進んでゲームに参加し、友達と自分の違いを認め合いながら、友達とのふれあいを楽しんでいる。                      ( 観・インタビューシート・振り返りカード )</p> <p>・ H R T は、児童 E, F を見守り、クラスの数名を見取る。</p>
<p>4 終わりのあいさつ ( Farewell )                      (1) 本時の活動を振り返り、感想を発表する。 5分</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>( 振り返りの観点 ) ~ 振り返りカード ~</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友だちに尋ねたり、自分の「できること」「できないこと」を伝え、最後まで会話を続けることができたか。</li> <li>・ 友だちと自分とのちがいを知り、楽しくコミュニケーションを図ることができたか。</li> </ul> </div> <p>(2) 次回の予告をし、終わりのあいさつをする。                      Thank you very much.                      Good-bye. See you next time!</p>	<p>・ 賞賛の言葉をかける。</p> <p>・ Good-bye.                      ・ See you next time.</p>	<p>・ That's all for today.</p> <p>・ Good-bye.                      ・ See you next time.</p>	<p>・ 本時の振り返りをし、児童のがんばりを賞賛する。また、友達のがんばりも認め、みんなで賞賛する気持ちをもてるようにする。</p> <p>・ BGM を流して楽しい雰囲気できれい終わり、次時への期待感をもたせる。</p>

## 8 授業研究の成果

### (1) 体験重視の活動そして発信の場へ



A L Tが“Can you play tops?”と聞いたのに対して、児童は“Yes”と答えた。ところが、実際にやってみるとできないこともあった。児童は、「Yesだけど、少しだけ。」という認識を得た。第1時の導入は、自分がどの程度できるか把握するのに、とても重要な体験活動であった。自分ができていることを判断しながら活動を進めることで、インタビュー活動での表現の広がりにつながっていった。また、第4時の活動では、インタビューゲームをしたことをもとに、グループ活動で、「Who am I?」クイズを行った。前時までの“Can you ~?” “Yes, No”という会話はできていたが、“I can swim. I can play baseball. But I can't cook. Who am I?”と表現することができない児童が多かった。児童の発達段階から疑問文から平叙文に直すのはまだまだ難しいと考える。ところが、これまでの慣れ親しんだ表現(“Can you ~?” “Yes, No”)を使いながら、自分なりに何とか相手に伝えようとして工夫をしてクイズを出す児童も見られた。

### (2) インタビューシートの工夫(資料1 英語ノート活用)

コミュニケーションを苦手とする児童がインタビュー活動後、A～Hまで8人の名前をそろえることができた。質問をした相手が、A～Hまでどこに当てはまるのか楽しみながら、インタビューできていた。実際に全箇所そろえられたのは3人ほどであったが、多くの人と積極的にコミュニケーションを図ることができた児童が多かった。

### 資料1「インタビューシート」



### (3) 豊かなコミュニケーションの工夫 ~思考力・判断力・表現力をはぐくむ視点から~

答え方を“Yes, very well.”, “Yes, I can.”, “Yes, a little.”, “No, I can't.”の4段階に分け、表情・ジェスチャーをつけたことにより、児童の表現の幅が広がった。また、質問に対して、思考を働かせ判断していくことにより、自分の新たな気付きがあったのではないかと思われる。決められた会話に当てはめるのではなく、相手の意外な面に気付きながら、リアクションをし自己表現をしていくことで、コミュニケーションが豊かになっていった。結果として、幅のある表現力が養われつつあると考える。

### (4) 抽出児童の見取りから授業を評価する

本時では、評価規準を基に、児童の見取りを行った。振り返りの時間にF男が手を挙げて「友達と会話をするのが楽しかった。」と答えた。参観教師の記録からも、この児童については「おおむね満足」と評価できた。と同時に、他の見取った児童からもこの授業がねらいを達成できたと判断できた。

これまでの実践を通して、児童に大きな変容が見られてきている。外国語活動は、国際教育の観点から育てる児童一人一人の人間教育であり、そのはぐくまれた力は、児童の「生きる力」の源である。その培われた力をいかに中学校へとつなげていくのかが、今後の課題である。

発表につなげる 4 技能を統合的に活用させる英語科学習指導

- 1 単元名 「クラスの実態を調査せよ！」  
(発展的コミュニケーション活動 Special Program )

2 単元の目標

積極的にコミュニケーション活動に取り組み、課題を解決しようとする。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

習得した言語材料を適切に用いて、自分の考えなどを相手に伝えることができる。

(表現の能力)

相手が話した内容を正確に聞き取ることができる。

(理解の能力)

場面や状況にふさわしい表現を理解している。(言語や文化についての知識・理解)

3 教材観

これまでも、授業の中でゲーム的な要素を取り入れたコミュニケーション活動を行ってきたが、それが実質的なコミュニケーションになっていたとは言えず、言語材料の習得を促すためのパターンプラクティスになりがちな面があった。そこで、本授業では、「中学校学習指導要領解説 外国語編(平成20年9月) 第1章総説 2「外国語科改定の趣旨」にあるように、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することをねらいとした4技能を統合的に活用させる授業を展開する。

第1学年の1学期には、be動詞や一般動詞の疑問文、否定文、whatを使った疑問文などの学習をしている。これらの言語材料を活用して「相手から情報を得る、得た情報を発信する」という場面を展開する中で、必然的に4技能を統合的に活用させながら、「考えて表現する」、思考力、判断力、表現力の育成をねらいとして指導を展開した。

4 生徒の実態

英語に関する意識調査(平成21年6月8日実施 第1学年1組 36人)

Q1 あなたは英語の学習が好きですか。

はい(8人) どちらかといえばはい(21人) どちらかといえばいいえ(6人) いいえ(1人)

Q2 あなたは英語で話すことが好きですか。

はい(10人) どちらかといえばはい(18人) どちらかといえばいいえ(7人) いいえ(1人)

Q3 あなたは英語で文を書くことが好きですか。

はい(10人) どちらかといえばはい(16人) どちらかといえばいいえ(5人) いいえ(5人)

Q4 あなたは英文を読むことが好きですか。

はい(11人) どちらかといえばはい(20人) どちらかといえばいいえ(3人) いいえ(2人)

Q5 あなたは英語を聞くことが好きですか。

はい(11人) どちらかといえばはい(19人) どちらかといえばいいえ(6人) いいえ(0人)

英語の学習を始めて2か月になる。英語学習の初期段階でもあり、英語学習への意欲を高めることが大切だと考え、ALTと協力しながらフォニックスやチャンツなどを導入し、生徒が英語に関心をもてるように努めてきた。現在では、大きな声で発声したり、積極的に口

ールプレイングやコミュニケーション活動に取り組むことのできる生徒が多い。

6月8日に実施したアンケート調査から 約4分の3の生徒が「英語の学習が好きですか。」という質問に対して肯定的な解答をしている。否定的な回答をした生徒はすべて、「覚えるのが面倒で難しい。」「発音がわからない。」という理由をあげている。これらのことから、生徒の中には知識として定着させるための反復練習が不十分であることがわかった。生徒の英語学習に対する意欲を高めることと合わせて、効果的な反復練習を取り入れるなど、言語材料を習得させる具体的な手立てを含む指導が必要であると考えられる。

## 5 研究主題に迫るための手立て

### (1) 4技能の活用を求める学習課題の設定

ある程度のインプット量がないと、インタビューをしたりプレゼンテーションをしたりすることが難しいと考えがちである。しかし、場面設定を工夫することにより、第1学年でも可能なコミュニケーション活動を展開したい。そのために今回は、クラスメートの特徴等を調べ、調査結果をグラフで示し、英語で説明するという課題を設定する。

会話をする必然性や聞いてみたいという関心などがないと、コミュニケーションはなかなか成立しない。そこで、「何味のラーメンが一番人気があるか」、「好きな飲み物は何か」「クリスマスにほしいプレゼントは何か」など、生徒が関心を示しそうな調査内容を指令文として示す。生徒は、自分が担当する調査内容をインタビューするためにどのような表現が適切かを考える。その考える段階で生徒にこれまでに学んだ言語材料を活用すれば表現できる内容のものであることに気付かせる。自分で考えた英文を教師に認めてもらえれば、生徒は自信をもってインタビューに取り組む。そして、得た情報を分析してグラフ化し、聞き手に、より分かりやすく伝えるようにする。その後、調査結果を説明するための英文を書き、リハーサルをした後に、実際にプレゼンテーションを行う。この一連の学習には、「書くこと」「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の4技能を活用することが求められる。そして知識・技能を活用する場面を設けることは生徒にとって英語でコミュニケーションしたことを実感できる重要な体験になり得るものと考えられる。

### (2) 学び合いを生み出す学習形態の工夫

コミュニケーションの前提として、他とのかかわり合い方をどのようにするかという意識も重要である。いつも仲のよい友達との限定的なかかわりだけでは、コミュニケーション能力をはぐくむことは難しい。課題解決に向けてペアで様々な相談をしたり、役割を分担するなど工夫して活動したりすることを要求することで、必然的に学び合いが生じると考える。そのため、今回の実践では、無作為に座席の隣同士の男女をペアとし、調査から発表まで二人で協力して活動するものとする。

さらに調査内容の指令文に「クラスの男子の中で...」「クラスの女子の中で...」と条件をつけることによって、英語での調査活動の際には、不特定多数の生徒とコミュニケーションを図る機会を作る。尋ねる相手によって、接し方や話し方を感じたり考えたりしながら活動するものと考えられる。

### (3) 既習事項の活用

今回の実践をSpecial Program と名付け、Unit 5までの学習のまとめとして実施するが、一連の活動の中には意図的に既習事項を関連付ける。今回は、Speaking Plus 1で学

習した“Excuse me.”“Thank you.”“You're welcome.”の使い方をインタビューの中に入れることとする。パターンプラクティスの要素もあるが、相手や話しかける状況に応じて抑揚や声の大きさを工夫するなど、それらの表現の使い方を意識できるものとする。また、発表の際には、単数形、複数形の区別をつけて文章を作る必要が出てくるなど、既習事項を十分に活用させることができるものとする。

## 6 指導と評価の計画（2時間取り扱い）

次時	学習内容と活動	関	表	理	知	評価規準（方法）
1 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指令文をもとに英文を考え、インタビューをする。</li> <li>・ 調査結果をグラフ化し発表原稿を書く。</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学んだ表現を使いながら、言語活動を行っている。 (観察, ワークシート)</li> <li>・ 既習事項を活用し、調査結果が伝わるように文章を書くことができる。 (観察, ワークシート)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ リハーサルを行う。</li> <li>・ グラフを示しながら発表をする。</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調査した結果を、相手に伝わるように大きな声で発表することができる。(発表)</li> <li>・ 発表の内容を理解することができる。 (ワークシート)</li> </ul>

## 7 授業の実践（本時の指導）

### (1) 目標

英語で積極的に調査活動に取り組むことができる。

既習事項を活用し、調査結果が相手に伝わるように文章を書くことができる。

### (2) 準備・資料

指令書、インタビュー記録シート、発表原稿作成用紙、グラフのフォーマット  
自己評価シート、実物投影機、リスニングジャッジシート

### (3) 展開

学習活動と内容	教師の働きかけと評価	
	JTE	ALT
(第1時)		
1 Greeting & Chants		
2 Today's target 学習内容の確認をする。 クラスの実態を調査し、報告し合おう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習の流れがわかるシートを用意し、生徒が学習内容を理解できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どのように調査や報告を行うか JTEとALTでデモンストレーションする。</li> </ul>
3 Review キーフレーズの復習をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カードを用意して調査に必要なキーフレーズを復習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キーフレーズを使って生徒に質問したり、生徒からの質問に答えたりする。</li> </ul>
4 Interview (1) 調査内容を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の興味を高めるために、調査内容が書いてあるカードを封筒に入れておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JTEといっしょに封筒を手渡し、激励の言葉をかける。</li> </ul>

<p>(2) 調査に必要な英文を書く。</p> <p>(3) 調査活動を行いワークシートに記録する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで協力して活動しているかを観察し，必要に応じて助言する。</li> <li>・生徒が自信をもって活動できるように，生徒が考えた英文を点検する。</li> <li>・調査活動の間は英語だけで会話するように指示する。</li> <li>・ALTやJTEにも質問するように促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアで協力して活動しているかを観察し，必要に応じて助言する。</li> <li>・生徒が考えた調査のために必要な英文を点検する。</li> <li>・生徒が共通して間違えていることや身に付けさせたい会話の技法などについて助言できるように生徒の活動の様子を観察する。</li> </ul>
<p>・英語で積極的に調査活動に取り組むことができる。 (観察，ワークシート)</p>		
<p>5 Preparation for the presentation</p> <p>(1) 集めた情報をまとめ，グラフ化する。</p> <p>(2) 発表原稿を作成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グラフに記入する文字は，できるだけ英語で書くように指示する。</li> <li>・生徒の発表原稿を点検する際，生徒の考えを生かして発表させるために修正しすぎないようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が意欲的に活動できるように，机間指導しながら生徒に話しかける。</li> <li>・生徒の発表原稿を点検するが，修正し過ぎないようにする。</li> </ul>
<p>・既習事項を活用し，調査結果が伝わるように文章を書くことができる。 (観察，ワークシート)</p>		
<p>(3) リハーサルを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原稿を棒読みせず，聞き手に顔を向けて発表するように伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の仕方のよい例と悪い例を示す。</li> </ul>
<p>(第2時)</p> <p>6 Presentation</p> <p>ペアで役割を分担し，調査した内容を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グラフをクラス全体に示せるように拡大機を設置しておく。</li> <li>・生徒が集中して発表を聞けるように，ジャッジシートに記入させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表した生徒に適宜質問をしたり生徒の自信につながるようなコメントをしたりして，コミュニケーションを図る。</li> </ul>
<p>・調査した結果を，相手に伝わるように大きな声で発表することができる。 (発表，観察，自己評価)</p>		
<p>7 Self evaluation</p> <p>自己評価をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自信や達成感をもたせられるように，生徒の活動を認め励ます。</li> <li>・発表の中で間違いの多かった部分を取り上げ，生徒に示す。</li> <li>・自己の理解度を確認させるために自己評価を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・JTEとのやりとりの中で，正しい表現を生徒に示す。</li> </ul>



## 8 授業研究の成果

### (1) 4技能すべてを活用する学習課題の設定について

生徒は、2人組でインタビューをして集めた情報を英文でまとめ、それを視覚的資料を示しながら発表した。(資料1) この一連の学習で、生徒は主体的にインタビューに必要な英文を考え、それをもとに積極的に調査活動を行い、意欲的にコミュニケーションを図っていた。発表のための原稿を作成する際には、既習事項を思い出しながら協力し合って文章を書いている様子が見え、教師側が意図した。

### 資料1 「発表の様子」



英文だけでなく、調査結果に対する感想を書いたペアもあった。発表においては、自信がないためか原稿を読む生徒が多かった点は課題である。また、この段階で、スペルや語順などの生徒が間違いやすい点を把握することができ、これについては、最後にまとめて指導することにした。しかし、調査結果をグラフ化して示したことで、表現に多少の間違いがあっても聞く側には内容をほぼ正確に伝えることができていた。

このように、「読み」「書き」「聞く」「話す」の4技能を活用する必要がある学習課題を設定したことが生徒の主体的な活動を促し、発信するための方法や表現を考えたり学習したことを活用しようとしたりすることにつながったと考える。

### (2) 学び合いを生み出す学習形態の工夫について

座席が隣同士の男女のペアで活動しインタビューに条件をつけた結果、少数の気の合う仲間だけで活動しがちな生徒が、あまり話したことがない相手に話しかけることができたという感想があった。また、インタビューや発表を分担して行うことによって自分の責任を果たそうとしたり、男女で協力して原稿を書いて発表したりする姿が数多く確認できた。学習

### 資料2

### 「インタビュー活動の様子」



課題を工夫したことによって生徒が主体的に取り組むようになり、結果として普段マンネリ化しやすい活動が積極的なコミュニケーション場面になったと考える。(資料2)

### (3) 既習事項の活用について

インタビューの際、17人以上の友だちから情報を得なければならないので、あまり話したことがない生徒にも必然的に話しかけることになった。生徒は自然と“Excuse me.”と呼びかけ、“Thank you.”に対し“ You're welcome.”と応じていた。第1学年の1学期という学習段階なりに、習得した様々な表現を十分に活用し、会話を通して必要な情報を得ることができていた。今後は、会話のバリエーションが増えるように、相づちの表現等も指導していきたい。また、「書く」活動は、教師が想定していたよりもだいぶ時間を要した。今回は、書くことに焦点を当てた授業展開ではなかったが、ある程度まとまった文を書けるように、日ごろの授業の中で指導する必要性を感じた。

今回の授業では、既習事項のまとめとして4技能を統合した授業を展開した。学期のまとめとして、また、いくつかのユニットを学習した後にこのような活動を取り入れることは、どの学年においてもそれぞれ段階に適合させた形で実施できるものとする。

自分の考えや気持ちなどを書いて表現する力を育てる英語科学習指導  
 パラグラフ・ライティングの実践を通して

1 単元名 「Let's Read 1 『A Magic Box』」 (New Horizon English Course 2)

2 単元の目標

自分の考えや気持ちなどをまとめた文章で書くことに意欲的に取り組もうとする。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

自分の考えや気持ちなどをまとめた文章で書くことができる。 (表現の能力)

自分の考えや気持ちなどをまとめた文章で書く方法を理解できる。 (理解の能力)

自分の考えなどを書くために必要な語や文の使い方を理解することができる。

(言語や文化についての知識・理解)

3 教材観

本題材は「三つの願い」をかなえてくれる魔法の箱の話である。読み物教材としては対話文が多く、既習表現を確認しながら読み進めることができるが、三つ目の願い事を生徒が自由に考えるという創造的な課題も用意されている。生徒には三つ目の願い事をどんなことにすればよいか、その理由も含めて考えさせ、それらをパラグラフ・ライティングの手法を用いて、第2学年段階でのまとめた文章を書いて表現する力を育てたいと考える。

4 生徒の実態

表に示すとおり、英語の授業の中で「書くこと」を苦手としている生徒は全体の約7割を占めている。その中で「書くこと」を苦手としている理由としてあげたものには、「単語が書けない」というものから「文の構成が分からない」や「内容がまとまらない」といったものが多かった。また、英文を書く実態調査では、答えのみしか書けていない生徒が半数以上であった。また、全く書けない生徒も約5分の1おり、英文の作り方も含め、まとめた文章を書くための手立てが必要と考える。

表1 英語の学習に関する意識調査

(平成21.9.7実施 第2学年1組39人)

英語の学習で苦手な活動は何ですか。	
・読むこと	1人
・聞くこと	4人
・話すこと	6人
・書くこと	28人
なぜ書くことが苦手なのですか。 (「書くこと」を苦手とした生徒のみ・複数回答)	
・文の構成が分からない(語順)	13人
・書きたい内容がまとまらない	9人
・その他(単語が難しいなど)	8人

表2 英語の文章を書く力に関する実態調査

(平成21.9.7実施 第2学年1組39人)

課題：あなたはよく外で遊びますか、それとも室内で遊びますか。理由も含めて三文以上の英語で書いてください。	
・三文以上の英語で理由も書いている	6人
・一文で答えのみしか書けていない	25人
・無 答	8人

5 研究主題に迫るための手立て

中学校学習指導要領解説外国語編(平成11年9月)では、英語の目標に、「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。」とある。また「与えられた語や文を書き写すことができるだけでなく、自分の考えなどを書くことができることを重視している。」と述べられている。加えて、新中学校学習指導要領

(平成20年3月)では、書くことの言語活動として、「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。」が示されている。

パラグラフは、「ある主題をもって内容的に統一された文の集合」のことで、日本語では「段落」と訳されることが多い。英文のパラグラフでは、同一のパラグラフ内は同一のテーマに沿った内容の文で構成される。

千葉大学教授の大井恭子氏は『パラグラフ・ライティング指導入門』(平成20年8月)の中で次のように述べている。「パラグラフの構成には、二つの重要な点があり、一つが結束性(cohesion)で、もう一つが話題の一貫性(coherence)である」結束性とは、接続表現を正しく用いて文と文をつないでいることである。また、話題の一貫性とは、トピックセンテンスで述べられたテーマがパラグラフ全体で一貫して述べられていることである。

本研究では大井恭子氏の論を参考に、グループワークを基本として、まとまった文章を書くために以下に示す四つの段階で手立てを構築した。

- Step1 : 材料を準備し、吟味する段階
- Step2 : 材料を実際に英文にする段階
- Step3 : 振り返る段階
- Step4 : 英文を他と共有する段階

(1) 材料を準備し、吟味する段階

この段階では、「最終的にどの程度の英文を書くことを目標にするか」を具体的に生徒にイメージさせるために英文のパラグラフを例示する。次にウェビングを使って英文にするためのアイデアを創出させる。そこで出た様々な意見を同質のもの同士でグループ分けをし、パラグラフの骨組みとなるアウトラインを作成させる。

(2) 材料を実際に英文にする段階

この段階ではアウトラインが具体的にないことが多いため、その内容をより明確にする作業である「アイデアの深化」を行う。「なぜそう考えるのか」、「具体的にはどういうことか」という質問を教師がすることで、自分たちが書きたいと考えていることがより明確になり、英文を書く際にも具体的な記述が可能になると考える。次に英語に直しやすい日本語に言い換える活動を行う。生徒が英文を作る際に多くみられる間違いとして、日本語のままの語順を英語に直したもののや、難しい日本語をそのまま英語に直し意味の伝わらない英文にしたものなどがある。この問題を解決するために、日本語を英語に直しやすい表現に言い換えてから英文にする必要がある。

(3) 振り返る段階

ここでは、生徒が書いたパラグラフを全体の場で示し、Correction code(資料1)を使って英文の間違いをお互いに探し合う活動を行う。ここでは直接英文を直すようなことはせず、間接的な指導にとどめておく。自分たちでどのように英文を修正すればよいかを考えた方が、より修正能力が高まると考えるためである。その指摘をもとに正しい英文に直し、パラグラフを完成させてゆく。

資料1 Correction code の例

コード	意味	英語ではこういうことです。
NOS	意味をなさない	<b>NO</b> nSensial
WW	単語の誤り	<b>Wrong Word</b>
NN	必要なし	<b>Not Necessary</b>
WWO	語順の誤り	<b>Wrong Word Order</b>
WS	スペルの間違い	<b>Wrong Spelling</b>
WA	冠詞の誤り	<b>Wrong Article</b>
NP	別のパラグラフに	<b>New Paragraph</b>
P	複数形に	<b>Plural</b>
NW	言葉が抜けている	<b>Need Words</b>
WT	時制の違い(現在・過去・未来)	<b>Wrong Tense</b>
C	コンマを入れる	<b>Comma</b>
F	ピリオドをつける	<b>Fullstop</b>
CL	大文字にする	<b>Capital Letter</b>
LL	小文字にする	<b>Lower case Letter</b>

#### (4) 英文を他と共有する段階

ここでは読み手を考えて書くことを意識させるために、書き直したものを友達同士で読み合うピア・レビューを行う。読む観点を明確にするためにピア・レビューシートを使い、パラグラフの構成などについてお互いにチェックし、感想などを書いて相手に渡すようにする。

以上のような段階を踏み、まとまった英文を書かせるトレーニングを積み重ねることで書くことに対する抵抗感を少しずつ減らし、書いて表現する力を育てていきたいと考える。

### 6 指導と評価の計画（8時間取り扱い）

次	時	学習活動と内容	関	表	理	知	評価規準（方法）
1	1	・言語材料の導入と授業のガイダンスを行う。					・新出単語の綴りや意味を理解できる。（小テスト）
	2	・教科書の音読と内容理解					・教科書を正しく音読し、内容を理解できる。（観察）
2	1	・パラグラフ・ライティングを行うための練習をする。					・パラグラフの構成やつなぎ言葉について理解することができる。（ワークシート）
	2	・パラグラフを構成するためのアイデアを出し、アウトラインを作る。					・グループで意見を出し合い、パラグラフのアウトラインを作ることができる。（ワークシート）
	3	・アイデアを深化し、英語にしやすい日本語に言い換える。					・アイデアをより具体的にし、英語に直しやすい日本語に変えることができる。（ワークシート）
	4	・つなぎ言葉を使ってパラグラフの構成をする。					・パラグラフの構成で英文を書くことができる。（ワークシート）
	5	・自分たちが書いた英文の間違いを修正する。					・Correction codeを使って英文の間違いを指摘し、自分たちで修正することができる。（ワークシート）
	6	・パラグラフを完成させ、友達同士で英文を読み合う。					・ピアレビューシートを使ってパラグラフの構成や読んだ感想などを書くことができる。（ワークシート）

### 7 授業の実践（本時の指導）

#### (1) 目標

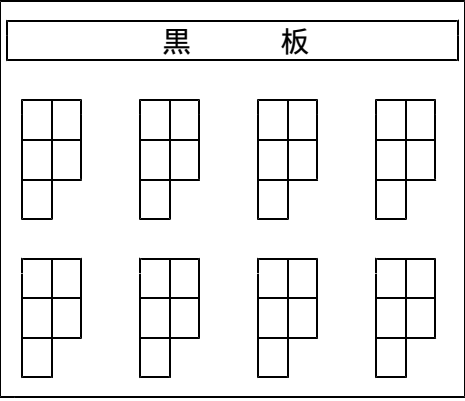
作成した文章を学級全体で修正し合う中で、英文の修正の仕方を知り、正しい英文で思いや考えを書き表すことができる。

#### (2) 準備・資料

各班の英文のパラグラフシート、書き直し用ワークシート、ビデオカメラ、プロジェクター

#### (3) 展開

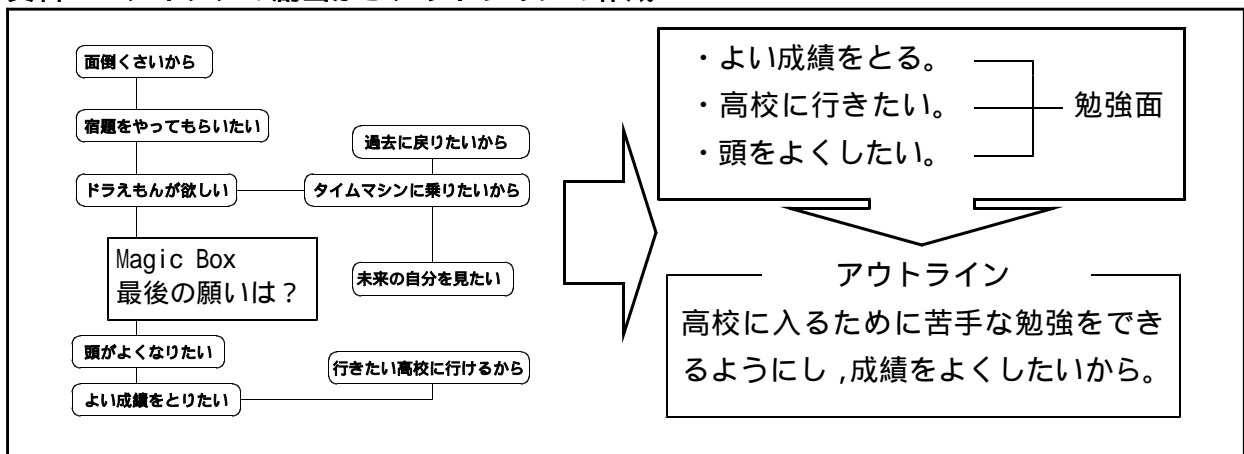
時間	学習活動と内容	指導上の留意点・評価
3	1 英語で簡単なあいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るい雰囲気であいさつをし、英語学習に取り組む環境づくりをする。</li> <li>・課題を提示し、本時の内容を押さえる。</li> <li>・自分たちが書いたパラグラフの英文を配布し読ませる。</li> </ul>
1	2 本時の課題を知る。 パラグラフ内の英文の間違いをさがし、みんなで修正していこう。	

15	<p>3 パラグラフ内の英文の間違いを修正する。</p> <p>(1) グループで話し合う</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>黒 板</p>  </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループごとに、英文のどこが間違っていて、どのように直せばよいかを話し合う。</li> </ul> <p>評 Correction code を使って英文の間違いを指摘し、自分たちで修正することができた。 (ワークシート)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Correction code を使うことで、生徒自身がどのような間違いをしているかに気付くことができるようにする。</li> </ul>
20	<p>(2) 各班の英文を全体場で確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各グループごとに意見を出させる。</li> <li>出された意見を必要に応じて板書し、生徒に問いかけながら修正を加えていく。</li> </ul>
5	<p>(3) 各グループごとにパラグラフを読み直し、修正箇所を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの書いたパラグラフを再度読ませ、修正箇所を再確認させる。</li> </ul>
5	<p>4 パラグラフを書き直す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートに英文を正しく書き直させる。また、英文を作る際に考えたことなどの「振り返り」も同時に書かせる。</li> </ul>
1	<p>5 次時の確認と終わりのあいさつをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の活動が、次時の活動につながることを伝える。</li> </ul>

## 8 授業研究の成果

(1) 材料を準備し、吟味する段階の指導から

### 資料2 アイデアの創出からアウトラインの作成へ



資料2はあるグループがウェビングにより「Magic Boxの最後の願いは何か。また、なぜそれを願うのか。」について書き出したものである。ここで出されたアイデアは資料2に示すように、同じような内容項目同士に分類し、インデックス(見出し)がつけられた。これがパラグラフを構成するためのアウトラインの元となる。この段階のアウトラインは内容が具体的でなかったため、次時にそのアウトラインを補完する具体例を挙げさせる活動へとつなげた。Step1の段階での成果としては、パラグラフ構成の基本的な考え方を指

導することで、生徒はまとまった文章を書くための具体的なイメージをもつことができたことがあげられる。

## (2) 材料を実際に英文にする段階の指導から

この段階では「アイデアの深化」で自分たちのアウトラインを具体的に書き直した。生徒は、この活動により英文を書く段階で読み手に伝わるような記述を心がけるようになった。資料3はアウトラインを具体的に書き直し、それを英文にするまでの段階を示したものである。これはパラフレーズしてから日本語を英語の語順に直したものであるが、英文としての間違いはあるものの、語順を意識し内容が伝わる英文になってきている。しかし英語に直しやすい日本語に変換することが一部の生徒には理解が難しく、今後その手立てについても再考する必要があると感じた。

### 資料3 日本語をパラフレーズし、英文に変換する

<理由1のアウトライン>

魔法で過去に行って出来事を変える。

<主語などを補った日本語にする>

私は魔法で過去に行きたい。なぜなら過去にあったことを変えることができるから。

<英語の語順に直してチャンクごとに>

私は / 行きたい / 過去に / 魔法で / なぜなら / 私たちは / できる / 変える / 出来事を / 過去の

<英文に直す>

I / want to go / to the past / with magic / because / we / can / change things / in the past .

## (3) 振り返る段階の指導から

資料4は実際の授業場面でのパラグラフ内の英文がどのように生徒から指摘をされたかを再現したものである。

このフィードバックにより生徒は自らの誤りに気付くことや、友達が使っている表現を取り入れることなどができた。この活動を通じて「みんなで間違っているところを探すことで、自分の間違いにも気付き、正しい表現を理解することができた。」や「友達の英文を読んで自分が書きたい表現の参考にできた。」といった感想をもった生徒が多かった。生徒が自らの間違いに気付き、英文を修正することができれば、さらに英語を書く力がつき、自己表現できる幅が広がっていくと考える。今回の授業で生徒からの指摘は文法上の誤りが主になってしまったが、他の表現方法や英文の内容などについても意見が出されれば、より表現の幅を広げる場になったのではないかと考える。

#### 資料4 英文の修正場面から

< 生徒やALTからの指摘 >

< 生徒が作成した原文 >

We want 101 **dog**<sup>P</sup> from a magic box as my last wish . We have three reasons . First , **There**<sup>LL</sup> are many **kind**<sup>LL</sup> of dogs . **Bigdog**<sup>P</sup> and **smalldog**<sup>P</sup> are cute . Second , we want to take a walk with **a**<sup>WW</sup> **dog**<sup>P</sup> . **And**<sup>NN</sup> we want to live with **my**<sup>WW</sup> dogs . **third**<sup>CL</sup> , we <sup>NW</sup> play **a**<sup>WW</sup> dogs <sup>NW</sup> frisbee and ball **use**<sup>NN</sup> in the open . So we want 101 dogs .

< 修正後 >

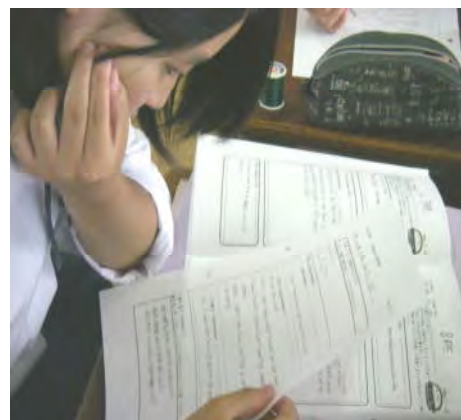
We want 101 **dogs** from a magic box as my last wish . We have three reasons . First , **there** are many **kinds** of dogs . **Bigdogs** and **smalldogs** are cute . Second , we want to take a walk with **our dogs** . We want to live with **them** . Third , we **want to play with our dogs** . **We want to play with** frisbee and ball in the open . So we want 101 dogs .

#### (4) 英文を他と共有する段階の指導から

書き直し後のピア・レビューでは、友達にメッセージを書くために熱心に読み合い、「どの理由に納得できたか。」についての意見や「もう少し理由を具体的にするとよい。」といったアドバイスを書いていた。メッセージをお互いに読んだ後は「友達から指摘されてなるほどと思った。」や「自分で書いたことが相手に伝わって嬉しい。」、「読みやすい英文になっていると言われてうれしかった。」といった感想や「既習表現が多く使われている英文が分かりやすい。」や「理由の部分で自分たちが言いたかったことを、他の班ではもっと分かりやすい表現で書けていた。」などの意見が出された。

今回の実践を通じて、まとまった内容の文章を書くことはもとより、英語の語順を意識して英文を作ることすらままならない生徒は、友だちと協力しながらも英文のパラグラフを書くことができた。事後の英文を書く調査では無答の生徒がいなくなったことから、今回の実践はある程度有効であったと考える。今回の実践を機に、パラグラフの構成を意識した英文を書くトレーニングを定期的に年間指導計画の中に組み入れ、英文を書いて表現する力を、さらに育てていきたい。

#### 資料5 ピア・レビュー



段階的なShow and Tellの指導を通じ、思考力や表現力を育てる英語科学習指導

1 単元名 「大切な物をクラスメイトに紹介しよう！」

2 単元の目標

クラスメイトの発表内容に対して、積極的に質問しようとする。

(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

発表方法を工夫して、効果的に伝わるように話すことができる。(表現の能力)

英語で紹介される発表内容を理解することができる。(理解の能力)

つなぎ言葉の正しい使い方を身に付けている。(言語や文化についての知識・理解)

3 教材観

本実践においては、Show and Tellを研究主題に迫るための手立てとして用いる。活動形態としては一般的なものであり、基本的に生徒は、自分にとって大切に、クラスメイトが見たり聞いたりして楽しめる物を選択し英語で紹介する。実際に英語で紹介する発表活動までの指導過程や実践に工夫を施し、話し手も聞き手も楽しみ、さらに発展的なコミュニケーションが生まれるような発表を行う中で主題に迫りたい。

また、言語材料はその定着を図る観点から、言語活動と関連付けて効率的に指導する必要がある。そのため、Show and Tellの発表原稿には必ず新出構文または語句を実際に活用することで、コミュニケーション活動と新出の言語材料の学習を一体的に行うこととする。

4 生徒の実態

普通の授業の様子からは、英語を人前で話すことについて苦手意識をもっている生徒が多いことがわかる。今回の実践に向けては、英語を用いて人前で話すことへの苦手意識を、少しでも軽減させるための具体的な支援が必要である。

また、本校第3学年においては、ALTとのチーム・ティーチングの授業は2か月に1回にも満たない。そこで、今回の実践の副次的な成果として、Show and Tellの指導を受けることを通じて、生徒がALTと授業以外の場で話す機会を増やすことも考慮した。

さらに、本校生徒の約半数が卒業後すぐに実社会に出て行くことを考えると、高校段階で、他者とのコミュニケーションを円滑に図る能力を高めることは重要である。そのために、特に英語の授業では、自分の思いや考えを主体的に表現したり、他者の話を関心をもって聞き、必要に応じて内容に関する質問をする等の学習活動が求められる。

5 研究主題に迫るための手立て

(1) 段階的な指導

Show and Tellの導入にあたっては、生徒に活動自体の流れを十分に理解させることに配慮する。事前準備や発表の手順等について、以下のように段階的に指導していく。

(別添、資料1)

Step1 「発表したい内容を決める」

紹介するアイテムの選定については、時間がかかりすぎることのないように選定法を具体的に示しておく。「自分にとって大切な物、そして人が見て楽しめる物」という条件の下に、紹介する物を選ばせることにする。



## Step2 「発表原稿作成のための活動」

聞き手が理解できるよう次の点に配慮する。

日本語で発表原稿を作る。

和英辞書を用い英語に直す。

新出構文・語句を最低一つは使うこと。

英文の点検を受ける。(休み時間・放課後)

## Step3 「発表の方法を考え、練習する」

A L Tとともに発音練習する。(休み時間・放課後)

聞き手が楽しめる発表の仕方を考える。

生徒の発表に先立ち、教師は実際に生徒の前で発表例を示し、この活動の面白さを生徒に伝えておく。今回の題材は教師のダイエット前の写真とダイエット成功後の写真とする。体重減少を表す折れ線グラフを使うことによって、生徒の興味・関心を喚起しつつ事例を提示することとする。

### (2) 話すことへの支援(発表者への支援)

発表者には十分な練習と暗唱を求めるために、発表の際に原稿は持たないこととするが、発表者が英文を忘れてしまった場合に備えて、事前に指導しておいたつなぎ言葉(Filler)の利用も促す(別添,資料2)。発表者がどうしても英文を思い出せない時のために、教師は発表者の原稿を手元に置き、思い出せない文の最初の単語を与えて支援できるようにしておく。また、教師は発表後には必ず英語で“Very good!, Great!, Excellent!”等の賞賛を積極的に行う。

### (3) 発表の理解を深める手立て

聞き手側が発表内容を理解しているかを確認するために、教師から内容に関する発問や原稿に含まれていた新出語句や文法事項についての発問をクラス全体に英語で行う。これにより、発表の内容が分からなくても、聞いている態度だけとっているということが起こらないように配慮する。

### (4) 英語で質問する意欲を高める手立て

発表に対する質問が英語でしやすいように、聞き手側には「Classroom English」(別添,資料3)と「Show & Tellをもっと×10英語で」(別添,資料4)をカードにしたものを手元に常備する。また、英問英答を促すために、聞き手側はグループを編成して行うこともある。英問を個人に指名するよりも、班に指名すると質問しやすいと考える。

Feedback Card(別添,資料5)のコメント欄には簡単な英語で書くように指示し、英語使用の機会を増やした。英問英答の際には文法的な正しさよりも、一生懸命に伝えようとする態度を十分に賞賛し、次の活動への意欲付けを図る。

### (5) 生徒が効果的な話し方を考える場面設定

聞き手側の生徒には、Show and Tellを聞いた後に、Feedback Cardに評価と感想を記入させる。発表者は肯定的なFeedbackを多く受けることができるように、コメント欄には、改善すべき点よりも発表の良かった点を多く記入するように指導する。

Feedback Cardは発表後すぐに教師が回収し、コメント欄に書かれている内容と教師からの

感想やアドバイスを簡潔にクラス全体に紹介する。これを毎時間続けることと聞き手側が六つの観点（態度・視線・身振り・表情・声の大きさ・総合評価）で評価しながら聞くことによって、「人前での効果的な話し方」を生徒自身が考え、学び、それを活用することを促す。

Show and Tellが一人につき2度終了したところで、クラスメイトによって書かれたFeedback Cardへの評価やコメントを利用して、「人前での効果的な話し方」がどのようなものかについて班ごとに話し合い、クラスメイト全員のアイデアとして整理して共有する。

（別添，資料6）

上記の五つの具体的な手立てを基に，工夫しながらShow and Tellに取り組むなかで，生徒一人一人の思考力や表現力を伸ばさせることをねらいとして実践に取り組むこととする。

## 6 指導と評価の計画（6時間取扱い）

次	時	学習活動と内容	関	表	理	知	評価規準（方法）
1	1	・Classroom Englishの導入・練習					・授業の流れを英語で理解したり，自分の意思を英語で表現したりする。 （ワークシート）
2	1	・Show and Tellの導入 教師のデモンストレーション					・準備段階をつかむ。 （ワークシートと教師による実例）
	2	・Show and Tellの実践 ・「Show & Tellをもっと×10 英語で 」カードの導入					・英語で感想を表現したり，質問したりする。 （ワークシート）
	3	・Show and Tellの実践 ・つなぎ言葉（Filler）の導入					・つなぎ言葉を使う。（ワークシート）
	4	・Show and Tellの実践					・表現方法を工夫して物を説明し，効果的に伝わるように話することができる。 （観察） ・発表を聞いて 英語で質問しようとする。 （観察）
3	1	・「よい話し方とは」を班ごとに話し合い，その後，クラス全体でまとめてレポート形式にして共有する。					・よい話し方が分かる。（レポート）

## 7 授業の実践

### (1) 目標

発表方法を工夫して物を説明し，効果的に伝わるように話することができる。

発表を聞いて，英語で質問しようとする。

### (2) 準備・資料

発表に使う物，Feedback Card，生徒の発表用原稿のコピー

(3) 展開

学習活動と内容	指導上の留意点 (評)は評価
1 あいさつと出欠確認  2 Show and Tellの発表 ・発表開始  発表終了  ・Feedback Cardに記入  ・発表について英問英答 (生徒同士, 教師と生徒)	・あいさつと出欠確認を英語で行うことで, 英語学習の雰囲気づくりを心がける。 ・司会を生徒が行うことで自分たちの発表会であるという意識をもたせる。 ・生徒が自信をもって発表できるように, 励ましの言葉などをかける。 (評) 表現方法を工夫して題材とする物を説明し, 効果的に伝わるように話すことができる。 (観察) ・生徒も教師も六つの観点(姿勢・視線・身振り・表情・声・総合評価)から4段階で評価する。(Feedback Card) ・コメントを書く際に簡単な英語を使うように促す。 (評) 英語で積極的に質問できる。(観察)
3 相互評価と教師からの評価 ・Feedback Cardを回収してクラスメイトからのコメントやアドバイスを教師が紹介する。	・「Show & Tell をもっと×10英語で」カードを活用させる。 ・教師は英問英答を行った生徒を英語で十分に褒め意欲付けを図る。 ・特に英語で書かれたコメントや感想を紹介し, 今後の英語の使用を全体に促す。 ・人前での話し方について教師からの評価を紹介し, 「人前での効果的な話し方」を意識させる。
4 新出語句と構文の確認 ・発表に含まれていた新出の語句・文法事項について復習する。	・Classroom Englishを使いながら, 発問を通して新出構文や文法事項を確認する。
5 まとめ ・Feedback Cardを発表した生徒に渡す。 ・次時の発表者の確認をする。	・スピーチに対する緊張を緩和し, 英語使用を促すために, 英語で多くの賞賛を行う。 ・発表者へ大きな拍手を促し, 支持的な雰囲気を醸成する。

8 授業研究の成果

(1) 段階的な指導を通して自ら考え表現することに対する意欲の高まり

英語での自己表現を求める課題は, 知識以外にも, 個性や創造性そして興味・関心が必然的に求められる。しかし事前に段階的な指導を取り入れることで, 生徒は, 表現活動に対して積極的な取組を見せた。具体的な活動の段階を示すことにより, どのようにすれば課題を達成できるのかを知り, それを知ることから自ら学ぼうとする意欲, そして自ら表現しよう

とする意欲を高めることにつながった。

## (2) 英語コミュニケーションの習慣化

Show and Tellを毎授業時の最初に位置付けたことで、だれかが英語で話し、それを聞き、感想を英語で書き、英語で質問し、英語で答えることが必然的に習慣化された。発表の題材は、テニスラケットや楽器などの部活動の用具、バンド活動の写真、書道の作品、マジックの実演、好きな芸能人のポスター、漫画を描くための専門的なペン、好きな野球球団のユニフォームなど、普段の授業では目にできないような物が多種多様に登場し、楽しい活動となったこともShow and Tellが定着したことの大きな要因である。

また、生徒に対する教師の声かけや司会者の生徒による進行も英語で行ったり、つなぎ言葉の利用や、発音練習のためにALTを活用することで英語に触れる機会が多くなった。

## (3) 英語で話したり質問したりすることの表現力の向上

この活動を導入する前には、生徒のほぼ全員が人前で英語を話したり質問したりすることに苦手意識をもっていた。しかし、「Classroom English」「Filler」「Show & Tellをもっと×10英語で」の利用による指導を通して、徐々に英問英答が成立し始めた。特に英問英答の際には、教師は積極的に英語によって十分に賞賛し、生徒の動機付けを図ることに配慮した。質問の際の文法的誤りを修正することよりも、質問の内容やそれに対する応答の内容に焦点を当ててコメントすることにより、生徒自身が英問英答への意欲を維持できるように配慮した。結果として、生徒たちは「自分にはできるはずがない。」と認識していたことが「できている。」ことに気付くことができた。

## (4) 人前で効果的な話し方を意識し実践する力の高まり

発表時ごとにFeedback Cardに記入し、それを教師がクラスメイトに紹介したり自らコメントしたことによって、生徒が人前で話し方を意識的にとらえることができるようになった。活動を進めるにつれて生徒自身が人前でより効果的な話し方を実践しようとするようになった。また、班ごとに「人前で効果的な話し方とは何か」を話し合い、クラスで共有したことによって、さらに話し方に対する意識が高まることとなった。

## (5) 授業の支持的な雰囲気への変容

生徒が自分にとって大切な物を紹介したことは、生徒が毎時の英語の授業を楽しみにするようになった。発表者と聞いている側の間には真の情報格差が存在し、Show and Tellの活動が聞き手を引きつける魅力を有していたことが要因である。また、普段の学校生活においては持ってこられない物を紹介できたことや、普段の授業ではできないことが体験できたことは、生徒にとって楽しかったようである。(資料7)

資料7 「発表の様子」



その上、授業前に一生懸命に練習をし発表する姿が、聞いている側にも何とか発表を理解しようという気持ちや意欲をわき出させていた。発表直前には、クラスメイトたちから「頑張れ!」、「大丈夫だよ!」などの声や、発表直後には「すごーい!」、「へえ〜」、「お〜!」などの声があがっていた。よい発表者(Good speaker)の真剣な姿が、よい聞き手(Good listener)を生み出すこととなり、結果的に授業が支持的な雰囲気へ変容していった。

### 3 研究のまとめ

平成19、20年度における教科に関する研究では、そのまとめに「より多くの様々な形態での発信場面を設けることで、真に『自分の考えや気持ち』を英語で表現することの意義や喜びを感じる生徒の育成を図る授業の在り方について、より実践的な研究に取り組む」ことを課題として示した。

これを受け、外国語活動及び外国語（英語）科は、新しく小学校を研究対象に加え、「自ら考え表現する外国語活動及び外国語（英語）科学習の指導の展開」という教科研究主題のもとに、1年間の研究を行った。思考力、判断力、表現力をはぐくむ授業の在り方を探るために、研究主題に迫るうえで効果的であると思われる手立てとその有効性を追求した。

1年間の研究の取り組みから考察される、主たる成果は以下の通りである。

小学校では、限られた言語材料の中でも、クイズ、インタビュー活動等を児童の発達段階に配慮しながら適切に組み合わせ、インタビューシート等の必要な支援を行うことで思考場面を生みだし、児童が自分の思いや考えを伝えることの喜びを感じる活動を創出することができた。

中学校、高等学校では、必要な言語材料のインプットの後に自由度の高い発表場面を設定することで、プレゼンテーションに向けた意欲的な取組を生み出すことができた。4技能を統合的に活用することができるようなインフォメーションギャップ（情報格差）、チョイス（言語材料の選択）、インタラクション（相互交流）というコミュニケーション活動の基本要素を盛り込んだ活動が、思考力・判断力・表現力をはぐくむ場面の創出につながった。

### 引用文献

文部科学省「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」平成20年8月

文部科学省「中学校学習指導要領解説 外国語編」平成20年9月

#### 関係者一覧

##### 1 研究協力員

美浦村立大谷小学校	教諭	大崎 浩子
境町立境小学校	教諭	斎藤 美紀
取手市立取手東中学校	教諭	北澤 宏
行方市立麻生中学校	教諭	金澤 泰治
県立鬼怒商業高等学校	教諭	森田 正彦

##### 2 茨城県教育研修センター

所長	中村 一夫
教科教育課 課長	小沼 光一
同 指導主事	飯山 克則
同 指導主事	茂在 哲司